

琉球大学学術リポジトリ

ポストリドレス期の「日系コミュニティ」と日本人
移住者：西部カナダにおける移住者の文化的帰属感
を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): カナダ日系コミュニティ, 日本人移住者, トランスナショナリズム, 文化的帰属感 キーワード (En): Nikkei community in Canada, Japanese migrants, Transnationalism, Cultural sense of belonging 作成者: 下茂, 英輔, Shimo, Eishuke メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010127

ポストリドレス期の「日系コミュニティ」と日本人移住者： 西部カナダにおける移住者の文化的帰属感を中心に

下茂英輔

- I. はじめに
- II. リドレス運動後の日系コミュニティ
- III. 母国への眼差し
- IV. 脱外国化
- V. メディアの役割
- VI. エスニック・コミュニティの将来：おわりにかえて

キーワード：カナダ日系コミュニティ，日本人移住者，トランスナショナリズム，文化的帰属感

I. はじめに

1. 問題の所在

1990年代初め以降，トランスナショナルな人の移動に注目が集まるとともに，日本から海外へ渡った戦後の移住者に関する研究も従来の「日本人移民」としてではなく，「越境日本人」（米山 2007:13）として行われ始めている。

在外移住者に関する先行研究では，海外移住の動機，一部の移住者¹⁾と現地の日系人との交流，移住者のナショナリティやエスニシティなどが明らかになってきた（名越 2005，Nagoshi 2007，山田 2001，下茂 2004，藤田 2008，南川 2005，塩原 2008）。しかしながら，これまでの議論で前提とされているのは，彼らとローカルな日系コミュニティとの乖離は疑いのないものであり，移住者の多くは現地のエスニック・コミュニティと距離を置き，「一匹狼的」にホスト社会に参加しているということである。例えば，塩原良和は，オーストラリアの日系社会を事例として，移住者が現地社会（特にオーストラリアのミドルクラス社会）に同化する傾向が強い点を指摘している（2008:156）。カナダでは，戦前からの日系ヘリテッジを継承し，文化的・政治的活動を行う組織や団体において日系人と一部の移住者の活動が見られるものの，移住者の多くは親睦を中心とした県人会や趣味的な活動への参加が多い²⁾（山田 2001:142）。

しかし，実際には両カテゴリーは完全に分断されたものではなく，既存の日系関連の組織や団体を「通過」してそれぞれに居場所を見出すものも多い。過去にバンクーバーの日系テレビ局で働いた経験のある Y さんは日系コミュニティを「通過点」と捉え，次のよう

に述べた。

「最初来たときは教会じゃないけど、そこをさーっと通り抜けるわけ、みんなが。そして居場所を見つけて離れていく。だから新しい移住者がそういうとこ（日系コミュニティ）に入って行って残る人もいるし通り抜けていく人もいる。そういう感じだよね。」（50代、女性、大学院生、バンクーバー在住）

このように、日系コミュニティをめぐる人びとの流れは実際にあるものの、移住者の日系ヘリテッジに関わる活動への参加は限定的といわざるを得ず、また日系コミュニティそのものから距離を置く移住者も少なくない。これを象徴する一例として紹介したいのが、「遺産桜」をめぐる集会である。筆者は、出席者の一人としてこの集会に参加した。「遺産桜」とは、バンクーバー市によるパウエル街に位置するオープンハイマー公園の桜の伐採に対する反対運動である。この決定は、2010年のバンクーバー冬季オリンピックに向け、ダウンタウン東部の美化計画の一環としてなされたもので、日系人が戦前に植えた桜の木2本を切ることが日系人および移住者に通告なしに計画された。これまで数回にわたり開かれてきた集会には30人から50人の参加者が集まった。その多くは日系人であったが、移住者や先住民、ヨーロッパ系カナダ人などの参加も見られた。

2008年12月7日、伐採された桜とその後のオープンハイマー公園にどのように日系ヘリテッジを継承するかに関する集会がバンクーバーの日系仏教会の集会場で開かれた。この集会への参加者は、日系ヘリテッジの維持に特に関心のある日系人（三世、四世）、新二世³⁾、移住者、日本人留学生、筆者合わせて16人で、そのうち移住者は4人であった。参加した移住者はこれまでに日系ヘリテッジの維持、発展に積極的に献身してきた人々とで、集会への呼びかけを見て参加した移住者は見受けられなかった。

そこで議論された内容は、市当局が予定している記念碑建設に対して日系コミュニティ側からどのような要望を出すかというものであった。筆者は集会後、ある日本語新聞の記者から次のような質問を受けた。「話し合いは日系人に関するものであるにも関わらず、移住者の参加者はとても少ない。この事実についてどう思いますか」（私信）と。

この集会への参加とその後の記者とのやり取りを通して、筆者はこれまでの研究で不問にされてきた、移住者が積極的に既存のエスニック・コミュニティに参加しようとしないう具体的な要因を明らかにする必要があるのではないか、という考えに至った。

上記の点が等閑視されてきた理由の一つは、対象となる移住者が主に戦後間もなく移住した人々であることが挙げられる。当時は、現在のように安価で太平洋を行き来できず、また差別や偏見も根強かったはずである。従って、彼らの多くは、近年の移住者と比べて現地に根を張る傾向にあり、ローカルな日系コミュニティとの接触の機会も多かったと考

ポストリドレス期の「日系コミュニティ」と日本人移住者：
西部カナダにおける移住者の文化的帰属感を中心に（下茂英輔）

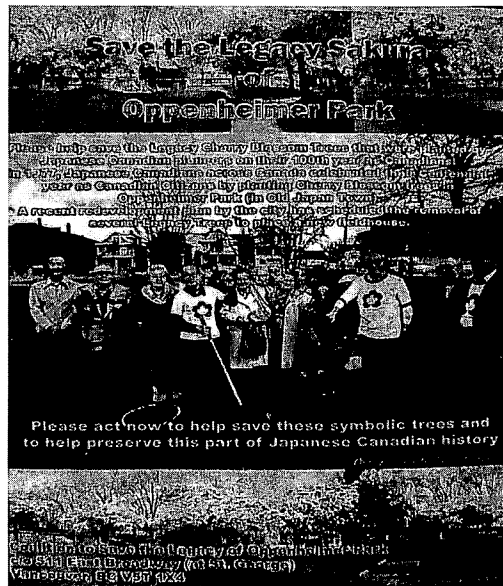


写真1 会場で配られたパンフレット（2008年6月28日）

えられる。また、「日系」という言葉およびカテゴリーに対する移住者のなじみの薄さも影響しているだろう。日系という言葉は、海外において日本と文化的紐帯を持つ人々を指すもので、永住権を獲得し移民となった移住者は、日系のカテゴリーに入る。ところが、移住者が自分たちを日系人としてアイデンティファイすることは極めて稀である。塩原（2008:155）も指摘しているように、移住者の日系人に対するイメージは、経済的困窮から逃れ、移住地でも過酷な労働や生活環境の中を生き抜き、世代を経てカナダの地に同化・統合してきた人々（いわゆるハイフン付きの「ジャパニーズ」）である。これに対して、移住者は自分たちを、ある程度裕福な経済状態の中で生まれ育ち、戦前の日本人移民やその子孫と比べ根無し草的要素が強く、比較的「カジュアル」に日本から移り住んだ（多くの場合定住の意志は不明確）人々と認識している。

2. 目的

本稿は、移住者の日系コミュニティへの関与の実態を、移住者の語りから明らかにすることを目的としている。これまで、接点やきっかけ、時間的余裕、共有する歴史の欠如などによって移住者と日系コミュニティとのギャップは必然的なものとされてきた。しかし、実際にはこれらの消極的な理由だけではなく、日系コミュニティと彼らの間にあるギャップには何か他の要因が絡んでいると考えられる。本稿では、上記を明らかにするため、具体的に以下の点に着目する。(1)移住の動機が日本でのネガティブな経験に基づく移住者

と、そうでない者の日系コミュニティに対する見解の違い。(2)移住後のカナダ社会への適応と日系コミュニティとの関係。(3)メディアの発達が移住者のライフスタイルに及ぼす影響。本稿では、特に移住者の文化的帰属感に焦点を当てる。文化的帰属感とは、「日本人」または「日系人」を含む「日系」に対する帰属意識である。従って、具体的には「日系」を強く掲げる政治的、文化的組織や団体への移住者の関与を中心に扱う。

次に、カナダ西部を事例として取り上げる理由は二つある。一つは、北米においてカナダ特有の制度であるワーキングホリデー制度⁴⁾を利用し、その後移民するケースが近年増加している点である。永住者の総数では、アメリカはカナダの6倍強である。しかし、アメリカへの移住を志望していても、永住権取得の困難からカナダを選ぶ移住者は多い。その際、アメリカにはない永住経路であるワーキングホリデー制度を経由する移住者が多い。特に近年、女性を中心にワーキングホリデービザで滞在後、移民ビザを取得するケースが増えている(加藤 2009:190)。また、2010年のバンクーバー冬季オリンピックの影響もあり、来年度の募集定員は5,000人から10,000人に増加した。今後もワーキングホリデーを経由して移住する若者は増える可能性があり、この点は見逃すことができない。

カナダの西部を対象としたもう一つの理由は、カナダにおける移住者の半数以上がバンクーバーを中心としたカナダ西部に居住しているという理由からである。特に、移住希望者、一時滞在者の多くがカナダで最初に降り立つのがバンクーバーであり、当地の日系コミュニティの動向を押さえることは必須であると考えた。

本稿で用いる事例は、2003年11月15日～30日、2004年3月2日～31日、2008年5月12日～2009年4月24日の約14ヶ月に渡るカナダ西部(ブリティッシュ・コロンビア州:バンクーバー市、アルバータ州:カルガリー市、エドモントン市、レスブリッジ市)でのフィールドワークに基づくものである。2003年はバンクーバーで予備調査として主に資料を収集し、2004年は日系文化博物館にてボランティアとして働きながら参与観察とインタビューを行った。2008年～2009年の調査では、バンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学に客員研究員として所属しながら、移住者87人への形式的インタビューおよび参与観察を行った。なお、本稿で用いる移住者の語りは、インタビュー内容の転写後、コーディングを経てその代表的なものを抽出した。

II. リドレス運動後の日系コミュニティ

カナダ西部、特にバンクーバーにける日系コミュニティは、ダウンタウン東部に位置するパウエル・ストリートを中心に日系人としてのアイデンティティを確認できる場として存在していた。しかし、第二次世界大戦を機に、日系コミュニティはその可視性を失う。その後、20年あまりの時を経て、日系コミュニティは新たな転機を迎える。戦後のカナダ日系コミュニティにおいて、もっともエポック・メイキングな出来事は、リドレス運動

であるといっても過言ではない。リドレス運動とは、第二次世界大戦中の日系人に対する強制移動、強制収容、財産の没収などに対するカナダ政府への公式謝罪と金銭的補償を要求した一連の運動を指す⁵⁾。この運動は、1977年にカナダ全土で行われた日系移民百年祭⁶⁾を契機に活発化し、1988年にカナダ政府からの公式の謝罪と補償金の支払いという形で解決に至った（佐々木 2003:41）⁷⁾。

日系移民百年祭、リドレス運動を通して、日系コミュニティは再活性化の動きを見せた。しかし現在、いわゆるエスニック集団としての日系は影を潜め、複数の組織や団体が散在する傾向にある。バンクーバーでは、毎年8月にパウエル祭という日系の祭りが開催される。この祭りは、百年祭後、唯一継続している日系のイベントであるが、その存在意義も変化しつつある。ワーキングホリデー経由でカナダに移住し、現在は日系関連の団体に働くKさんは、パウエル祭について次のように述べた。

「あそこ（筆者註：祭りが開催されるオッペンハイマー公園）は、日本人街だったし、そういった意味もあつたぶんやってると思うけど、みんな集まってお祭りやればいいのとはちょっと違うだろうなっていうのは思う。（中略）まあ、色んな団体あるけど、その人たちと会うのはあれが年に一回か二回だよ。本当、あれぐらいしかチャンスがない。だからそういう意味では貴重だよ。」（40代、女性、日系関連団体職員、バンクーバー在住）

日系人の高齢化が進むと同時に、三世や四世の多くはカナダ社会に著しく統合されていることもあり、日系ヘリテッジそのものに対する関心は日系人にとっても先細りの傾向があることは否めない。中でも移住者においては、特に「日系」色の強い文化的政治的運動に対する関心が非常に限られているのが現状である。カナダへの留学経験を持つ夫人の強い希望でカナダ移住に踏み切ったH夫妻は、日系コミュニティへの参加について次のように語った。

筆者「バンクーバーの日系社会の印象はどうですか。」

夫「考えたことないですね。日系人の中にもっと入っていかないとだめなんじゃないか。」（40代、男性、日系旅行会社職員、バンクーバー在住）

妻「多分まだ働くのに忙しくて日系人とか会わないよね。教会に行かない限り日本人に会わないから。全く日本人⁸⁾と会わない生活で、教会の中の人たちというのはすごく限られた人たちなわけで、それを日系社会と呼ぶには小さすぎるから、他になんにも接点がない。多分、仕事もなくなって老後フラフラしてたらどこかそういうのに入ろうかと思うかもしれないけど、今はそういう交わりをしようとか

いう暇がないよね。」(40代, 女性, 私立高校教員, バンクーバー在住)

では, 具体的にどのような要因によって移住者は日系コミュニティから距離を置くのだろうか。以下, 彼らの語りを中心に検討してみたい。

Ⅲ. 母国への眼差し

1. 「日本」の否定

移住者の動機で語られることが多いのが, 文化的・社会的要因による移住である。これは, 従来型のプッシュ・プル理論では説明することができない現代の移住形態の一つである。移住者と日系コミュニティとの文化的距離感の一要因として考えられるのが, 移住者が経験してきた「日本」に対する彼らの眼差しである。名越は, 日本社会に根強く残る「人の目」や「世間の目」などといった個人への人々の介入が, 彼らの移住を促す要因の一つであると指摘している(Nagoshi 2007:100-108)。このいわゆる日本的慣習は移住地でも受け継がれており, ある移住者は日系コミュニティを「日本の村」と表現した⁹⁾。日本人が「固まること」に対して, 移住者が嫌悪感を表す点についてはこれまでに指摘されており, 彼らは集団志向の日本人に批判や冷笑を向けたり, 敵意まで抱いたりすることがある(稲村 1980:136)。

現在の日系コミュニティは日本の縮小版と捉えられ, それはしばしば彼らを拘束する場として語られる。特に, 日本において「周縁」に追いやられていた人々は, 噂話, 「出る杭は打たれる」のような「日本的人間関係」に対して強い拒否感を抱いており, それは日系コミュニティへの参加にも反映されている。日本での会社員生活の後, ワーキングホリデーを経由してカナダに定住することを選んだIさんは, 自身がゲイとして日本社会で生活することの困難を次のように語った¹⁰⁾。

「何か友達とは心から全部喋れない。遊びに行くといっても, 実際は裏道に行ったりするわけですからね。誰かに見られてないかな, とかチェックしたりするわけです。何でコソコソせんとあかんのかと思いつつも, 日本ですからね。(中略) 周りから結婚しないのかとか, そういう話がありましたね。親があちこちから言われたんでね, この子はどうなってんのやって。だったら遠くに行ってしまうて勝手に一人で生きるわ, っていうのが気が楽なんかなって。」(30代, 男性, 日系旅行代理店勤務, バンクーバー在住)

こうした日本での経験は, Iさんの日系コミュニティ参加に少なからず影響を与えている。

「県人会とかがあるのは知ってるんですけど。行ってみたいけど、また何か面倒くさいこと、結婚してないんだったら彼女紹介したる、とか言われたら面倒くさくなるから。そんなのだったら、いかへんって。やっぱり、ゲイっていうところが大きいんですかね。自由気ままに生きてる、って感じですかね。」

日本でマイノリティ化された人々へのネガティブな眼差しは、時としていじめという形で顕在化する。高校卒業と同時にカナダの大学に進み、永住権取得の後、現在はカナダ人の夫と暮らすTさんは日本での学生時代を次のように語った。

「自分自身、周りのみんなと少し変わってる部分はあると思うんですね。小さい時からいじめにあったので、何かするごとに周りの目が気になって。」(30代、女性、日系関連NPO職員、バンクーバー在住)

カナダ人として生きていにもかかわらず、英語のアクセントに癖があるために日本人としてしか見られないことへのジレンマに悩み、彼女は日本的なものから距離を置くようになった。

「日本が好きじゃなくてこっちに来たのに、周りの日本人とも全然性格が違うのに、なんで日本人としてしか見られないんだろうと。日本人の友達も特に最初の4年間はいましたけどね、もちろん。でもなるべく英語の本を読むとか。日本の文化から自分で選んで離れていってましたね。」

現在は知人の紹介で日系関連の団体で働き、「日本人」としての自分を受け入れると同時に日系コミュニティへの愛着を感じ始めている彼女であるが、それまでは家族や限られた日本人以外とはほとんど日本語を話さなかったという。そして、必然的に他の日系人や移住者との接触は限られたものになっていった。

上記の事例のように、結果として日本食レストラン、日系旅行代理店、日系の団体や組織などの広義の意味での日系コミュニティに組み込まれている移住者も実際には多い。しかし、彼らの文化的帰属感と日系コミュニティは必ずしも密接に結びついているとはいえない。つまり、たとえ日系社会に身を置いていても、そこが必ずしも移住者にとって居心地のよい場所であるとは限らないのである。それは転じて、日本を脱出してカナダに住んでいるにも関わらず、なぜあえて再び日本で経験したしがらみのなかに身を投じなければならないのか、という主張を強化することになる。このように、日本での経験が喚起する「日本的なもの」に対する負のイメージは、消えがたい記憶として一部の移住者の中で生

き続けており、移住者の移住地でのライフスタイルや現地のエスニック・コミュニティとの関係性に与える影響は少なくない。

2. ライフスタイル移住と複数の「ホーム」

日本に背を向ける移住者がいる一方、現代日本人の特徴の一つとして、海外に対する憧れ、生きがいや仕事へのやりがいなどを日本以外に求める生き方が支持されつつある。こうした移住スタイルを志向する現代日本人をサトウは「ライフスタイル移住者 (Lifestyle migrants)」と呼んでいる (Sato 2001)。カナダの移住者においても同じ傾向は見られ、海外移住が彼らのライフスタイルの一部になっているケースも多い。以下のような前述した H 夫人の発言は、高度経済成長以降の日本社会を経験した多くの人びとに当てはまるものかもしれない。

「若い時から海外で一回生活したいなって思ってたんだけど、気がついたら結婚して、子供もできて、ああ、これでやっぱりどこかの海外に行くのはもう無理かなと思って、50年先の自分を想像した時に悲しくなったのね。何が悲しくなったかという、まあ日本では生活が、今はだいぶ違うかもしれないけど、安定してるから50年先まで見えちゃうというか。たぶん彼（筆者註：夫）は係長とか部長とかになって、ひょっとしたら家か何かに住んで、子供が大学に行ってとか、すごくつまんないと思ったのね。で、私たちは新婚旅行でカナダに来てたんですけど、私は大学の時もカナダに来てたのね。それで、カナダすごく気に入って。娘が小さい時じゃなきゃ移民、海外というか移動できないし、行きたいなと思ってて。」

海外で生活することへの憧れは、単に「行ってみたい」と同時に、経済活動を通してホスト社会を「体験したい」という感情をも引き起こす。

「別に日系が嫌とかいうんじゃないで、せっかくカナダに来たんだからカナダの会社で働きたいなと思って最初はレジュメを出してたんだけど、結局、それはかなり難しいということがわかって、日系の会社で仕事をしたんですけど。」

H 夫人はその後、教師になる夢を実現すべく、カナダの大学で教員免許を取得した。そして現在、私立高校で数学と物理を教えている。

現在、映画製作のディレクター、プロデューサーとして活躍する M さんも、仕事へのやりがいを求めてカナダに渡った移住者の一人だ。M さんは、日本で中学校教員、地方テレビ・ラジオ局のアナウンサー、パーソナリティとしてのキャリアに終止符を打ち、バン

クーバーの映画学校に通った。そして、現在、日系カナダ人三世のプロデューサーとともに、日系移民の歴史に関する映画を製作している。映画学校に入った当時のことを M さんは次のように語った。

「最初の一ヶ月が、本当にやばい。生徒の 4 割がカナダ人で、残りの 4 割がアメリカ人で、あとの 2 割が世界各国から来てる留学生だったんですね。なので、先生も本当に容赦なく普通のスピードで専門用語バンバン使って。だから、失敗しちゃうって思ったけど。でも一ヶ月ぐらいしたらやっとなんかついていけるようになって。」
(30代、女性、映画製作ディレクター／プロデューサー、バンクーバー在住)

これらの事例のように、移住者のなかには移住後に学校へ通い、新たに免許や資格を取得する人々も少なくない。特に成人を過ぎて移住した者にとって、語学のハンディを克服し、ホスト社会の人びとと同等の社会生活を送ることは決して容易ではない。しかし、それを可能にするのは、「希望する職業に就きたい」、「一度しかない人生をいかに送るか」、といったライフスタイルの充実に対する移住者の強い想いであり、それは移住後も継続する傾向にある。

ライフスタイル重視の移住と関連するのが、「ホーム」の複数化である。M さんにとって、日本とカナダはともに「お家」だという。

「日本に帰ったら帰ったで、ああ、帰って来たって思うし、バンクーバー空港に降り立った時に、ああ、戻ってきたみたい。だから両方本当にお家って感じ。何かもっと世界に、いろんな所にお家が増えればいいなって。」

このように、豊かなライフスタイルの希求は、海外移住が移住者の人生設計の一部である以上、一つの移住地で完結するとは限らない。つまり、生活の拠点を一定期間海外に置いている移住者であっても、それが永住かということ必ずしもそうではない。H さんは、カナダ移住後 18 年を経て、居住場所に対する心境の変化の現れを次のように語った。

「娘が日本に行ったので、今までだともうカナダかなと思ってたんだけど、やっぱり、だんだん年をとると日本もいいかなと、いろんな面で日本もいいかなと。若い頃はね、外国に憧れて、だんだん年をとってくるとね、体もあちこち悪いところが出てくるので、日本もいいかなと。あとまあ両親も徐々に年をとってきて、そういうものもありますし。だから、この先どうなるかわからないですけど。」

正確な数字は定かではないが、多くの移住者の見解によると、約半分の移住者がカナダ移住後日本へ帰国するという。その要因としてしばしば挙げられたのが、家族に関わる問題、移住前に思い描いていた海外生活とのギャップ、医療制度への不安である。Hさんの発言にあるように、両親を残して移住している者は少なくない。近年、家族の呼び寄せ制度を利用して日本から両親をカナダに迎える例も増加している。

また、複数のインフォーマントが指摘していたことだが、海外に対してとりわけ強い夢や憧れを抱いていた人の方が、理想と現実とのギャップを埋めることができず帰国するケースが多いという¹¹⁾。そして、カナダの医療システムにおいて特徴的なファミリードクター制度¹²⁾や、治療の予約からその実施までの期間の長さに対する移住者の不安は否定できず、実際、帰国せずとも定期的な健康診断や手術は日本で行ったり、それを希望する移住者もいる。

このような日本との関係の維持は、市民権獲得の意志にも反映している。筆者がインタビューしたインフォーマントの9割以上は、カナダの市民権を獲得する意志がないと述べた¹³⁾。これには日本が依然として二重国籍を認めていない点も大きく関係していると思われるが、それ以上に永住権取得後も一時滞在者型のメンタリティが移住者の中で継続していることが、カナダ国民になることへの拒否につながっているといえるだろう。

その一方で、たとえ子供が両親を呼び寄せたいと考えていても、住みなれた日本を離れ、一から生活の基盤を海外で築くことに難色を示す両親が多いのも事実である。また、実際にカナダで築いてきた生活基盤、日本での再就職の問題等で帰国の意志はあってもそれが実現できないケースや、仕事の関係上、カナダ市民権を取得せざるを得ないこともある。

実際に帰国する者、帰国の意志はあっても現実的にそれが不可能な者のいずれのケースであれ、日本は常に「ホーム」であり続けており、日本かカナダかという選択肢は常に彼らのライフスタイルの一部として内包されている。言い換えるならば、移住者は一定の地域に根を張るというより、常に動ける状態に身を置いている。

以上のように、日本以外に定住したとしても、移住者は常にトランスナショナルな移動の途中にある。そしてこの越境志向は終わりを定めることがもはや不可能かと思われるほど移住者の中に浸透している。

移住者にとっての「ホーム」は一つではない。一定の場所に自己を固定しない、あるいはしなくてもよい社会的背景があることにより、日系コミュニティは分散し、移住者の文化的紐帯は希薄なものになる。つまり、望郷の眼差しが複数化することで、一定の地域に根を張る誘引力は弱まり、結果としてローカルなエスニック・コミュニティに参加する必然性が低下するのである。

IV. 脱外国化

戦前にカナダに移住した日系一世にとって、移住地で遭遇する人々や文化は日本のそれとは180度異なっていたと言ってもいいだろう。特に、地方の農漁村の出身者が多かった一世にとって、カナダはまさに「異国」であった。これに対して、移住者が意識する外国と日本の境界は、戦前の一世代ほど固定化されたものではない。もちろん移住者のなかにはカナダに到着するまで、カナダを「寒い国」、「白人の国」というような漠然としたイメージしか持っていなかった者も多い。しかし、同時に多くの移住者は、出国前に北米におけるライフスタイルを身近なものとして感じている。また、心に描かれた北米は、必ずしも日本と乖離したものではない。ニューヨークとロンドンにおける日本人の若者に関する研究を行った藤田結子は、この点に関して同様の見解を示している。彼女によると、「近代的な」ライフスタイルをすでに獲得している日本の若者は、「欧米」や「西洋」を日本に「近い」あるいは「同じ」ようなライフスタイルを保持する場所としてイメージしている（藤田 2008:227-229）。この背景として考えられるのは、1960年代に本格化する日本の欧米化（特にアメリカ化）である。そして一方で、1970年代以降のカナダ社会における多文化主義の浸透およびマジョリティが持つ日本に対する価値観も変化している。日本での会社員生活に終止符を打ち、カナダに渡ったYさんは自身が経験した「アメリカ」を次のように語った。

「何かね、やっぱり私って1958年生まれなんですけど、アメリカナイズされてるんですよ。あの時代って。私バービー人形で育ったんですよ。だから西洋的なものに憧れる気持ちが強いわけ。何かこう、こけしとか置物とか、ダンスとか畳とかそういうものはもうあまり馴染みがなかったっていうか、何か根っここのところではわかりませんが、何かこう日本ってダサイ国っていうか、野暮ったい国だなんていうのがあって。」（50代、女性、大学院生、バンクーバー在住）

想像された欧米は、60年代、70年代以降急速に日本社会に浸透し、移住者に内面化していった。ガーデナー（庭師）として働くEさんにとって、カナダは外国であって外国ではないようだ。

筆者「カナダに来てカルチャーショックはありませんでしたか。」

E「あんまりないですね。今ぐらいの時代だと、そんなにないんじゃないですか？みんな。」

大体生活様式とかも似てますし、映画とか見ても大体わかりますやん、日本で映画見てたら、大体こんなもんかっていうのがわかりますし。」

筆者「そんなに、異国とか外国とかいう感覚はないですか。」

E「そうですね。来た時は外国に来たんやな、と思いましたが、でも最初だけですよね。」(30代, 男性, ガーデナー, バンクーバー在住)

また、在外感覚の希薄化は、移住者の移民あるいは移住に対する考え方にも影響を及ぼしていると考えられる。

筆者「カナダに移住してきたという感覚はありますか。」

E「いや、あんまりないんですよ。たまたま海外に引越してきた、というだけで。

日本国内で何箇所か移動しましたが、それとあんまり気持ち的には変わらないですよね。」

筆者「極端な言い方をすると、他県に行くような感じで海を渡ってきたと。」

E「ああ、もうそんな感じです。何が違うんやろ、と思いますよね。」

同様に、オーストラリアでの生活を経てカナダに移住し、現在では月刊の日本語フリーペーパーを編集しているN夫妻は、海外に移り住む感覚がカジュアルなものになっていることを次のように語った。

夫「(日本とカナダが)つながってる、帰らなくてもこっちで十分生活できる、そんな感覚ですよ。何ていうのかな、ボーダーっていうのが希薄ですよ、今、自分たちが感じるなかでね。日本、カナダっていうよりも、自分たちの生活する一部が、今カナダにあるみたいな。そんな感じですよ。」(50代, 男性, 雑誌編集, バンクーバー在住)

妻「だから、車でね、そこら辺走ってて、何か自分がどこいるかわからなくなっちゃって、逆に言うと、もっと外国に住んでる実感が欲しいみたいな。もう本当、溶け込み過ぎていて。違和感がなさ過ぎるといふかね。」(50代, 女性, 雑誌編集, バンクーバー在住)

戦後の日本社会における西洋文化の浸透とその日常化は、移住者の外国観に多大な影響を及ぼしている。それと同時に、受入国であるカナダ社会の変化も、移住者の海外に対する意識という点で見逃すことができない。

1971年にカナダの国是として制定された多文化主義は、その後の多文化主義批判や西洋的文化の優位性などの論争が絶えないものの、国家理念として着実に定着している。そして、文化的多様性に対する寛容さは、カナディアン・アイデンティティを語る上でしばしば引き合いに出される¹⁴⁾。このような社会変化の中で、カナダ社会への統合が著しい日

系二世や三世，四世（戦前に移民した日本人移民にルーツを持つ）などは，中流階級の地位を獲得し，モデル・マイノリティと称されてきた（Makabe 1998:58,山田 2000:218）¹⁵⁾。

日系人の社会的経済的地位の上昇に加え，戦後日本の急速な経済成長や，80年代から活発化し始めた漫画やアニメなどのサブカルチャーなどは，ジャパニーズに対する否定的なステレオタイプを拭い去り，マジョリティが移住者を受け入れる社会的基盤が構築されてきた。その結果，移住者はマジョリティが受け入れる文化資本をカナダ入国と同時に獲得しているといえる。たとえ彼らが日本人とホスト社会から名づけられたとしても，そこに戦中戦前のような侮蔑的意味合いが含まれることはほとんどなく，移住者自身もそれを享受している。南川文里は，アメリカにおける移住者を事例として次のように述べている。「彼らは，日系アメリカ人によって作られてきた既存のコミュニティ制度，アメリカ入国管理政策における「日本人」の優位性，そして現代日本の相対的な経済水準の高さなど，「ジャパニーズであること」の有利さを享受し，それを活用している」（2007:43）。

このように，西洋的文化の日常化とそれに伴う在外感覚の希薄化は，移住者が既存のエスニック・コミュニティに積極的に関わる契機を弱める一つの要因となる。また，カナダにおける「ジャパニーズ」イメージの好転によって，移住者が排他性に基づくエスニックな紐帯を強いられることはほとんどない。こうした状況を踏まえると，日本にいる日本人が自分たちのナショナリティを日常的に意識しないのと同様に，移住者も取り立ててエスニックな旗印の下に集う必要性が希薄であるといえる。

V. メディアの役割

「外国感」の希薄化と密接に結びついているのが，現代におけるエスニック・メディアおよびマスメディアの発達である。白水繁彦によると，エスニック・メディアとは「当該国家内に居住するエスニック・マイノリティの人びとによって，そのエスニシティのゆえに用いられるメディアである」（2002:14）。また，主流メディアとの違いとして，使用言語がエスニック言語であること，送り手にも受け手にも同胞もしくは類縁意識が共有されていることを挙げている（白水 2002:14-15）。つまり，エスニック・メディアの特徴は，ある特定のエスニック集団に必要な情報の提供と，エスニック・ネットワークを維持するためのツールといえる。

現在，バンクーバーには筆者が調査した限り，日本のエスニック・メディアとして少なくとも6つの活字メディア（バンクーバー新報，the 月報 Bulletin，ふれいざー，Oops!，CoCo Magazine，KLIP）と2つのオンラインメディア（JP カナダ，メイプルタウン）¹⁶⁾，そして2つのテレビ局（ICAS，テレビジャパン）がある（表1，写真2）。

表1は，戦後から現在まで継続している日系活字メディアをまとめたものである。1967年の移民法改正以前は，『月報』が日系コミュニティにおける中心的活字メディアであっ

表1 バンクーバーにおける日系の活字メディア一覧

	創刊年	部数	発行頻度	使用言語
the 月報 Bulletin	1958年	5,000	月刊	英語・日本語
バンクーバー新報	1978年	8,000	週刊	日本語
ふれいざー	1992年	12,000	月刊	日本語
Oops!	1998年	6,500	月2回	日本語
CoCo Magazine	2002年	6,000	隔月刊	日本語
KLIP	2008年	15,000	月刊	英語・日本語

出典：現地調査より筆者作成

た。『月報』は、グレーター・バンクーバー日系カナダ市民協会（Greater Vancouver Japanese Citizens Association: JCCA）が母体であるため、戦前からの日系人を対象とする傾向が比較的強い。一方移民法改正以後は、『バンクーバー新報』を筆頭に、移住者が立ち上げた雑誌が増えている。つまり、90年代以降の移住者にとって、これらのメディアは移住当初から身近なものだったと考えられる。

こうした特定のエスニック・カテゴリー内で共有される情報源およびエスニック・ネットワークの媒体としてのエスニック・メディアの機能は現在でも変わらない。しかし、エスニック・メディアの利用者のそれに対するアプローチの仕方と、利用方法は必ずしも日系コミュニティに固定化されたものではない。日本で出会った日系カナダ人の男性と結婚後カナダに移住したKさんは、日系メディアの発達を次のように述べた。

「Oops!とか新聞あるじゃないですか、私が来た頃は新聞の3枚ぐらいのページだったんですよね。それが今持っても重たいみたいな感じ、結構厚みがあって。やっぱり人がどんどん増えてきて、記事とかも増えてきたと思いますし、変わってきたなと思いますね。」（30代、女性、指圧師、バンクーバー在住）

ところが、エスニック・メディアの充実はエスニックなネットワークを強固なものにするとは限らない。移住当初は移住者同士の集まりに顔を出すこともあった彼女だが、それが継続することはなかった。

筆者「パウエル祭などには参加されていますか。」

K「初めの頃は行ってました。今は行ってません。（移住当初は）何かどこかで繋がってなきゃいけないみたいな、そういう気持ちがあって。よく日本人の塊のところには行ってみたいとかしてましたね。何かコネクションを作らないとみたいな。

でも今は別に自分は自分たちでここでやってきているので、そういうところに所属する必要はないかなと。」

このように、エスニック・メディアの充実と文化的紐帯を基礎とした移住者同士のローカルな活動は必ずしも直接的に結びついているとはいえない。それを後押しする形で、エスニック・メディアの作り手の意図にも、エスニックなつながりを強調するよりも、むしろ移住者のカナダ化を促す傾向が見られる。前述したN夫人は、編集しているフリーペーパーのコンセプトを次のように語った。

「日本人がカナダに、このバンクーバーで生活するときに、まあ溶け込めるっていうかね。英語が堪能で英語の世界に溶け込む人以外は行く場所も知れなければ情報も知らないとかね、そういうような感じだったので。ここにこんな面白いところがあるよとか、あるいは映画だの催し物の情報だのとか、あと社会的な問題とか、そういうのをいっぱい日本語で提供するとこっちにいる日本人の人たちがもっと溶け込んで、カナダ人として生活ができるようになるっていう、何かそういうようなのがありますね。日本人がここで土着化というのかな、まあ楽しんで生活できるようになっていうような感じですね。日本人だけ固まるんじゃないで。」

活字メディアや日本語テレビに加え、近年のインターネットの急速な発達とその普及は、移住者のトランスナショナルなアイデンティティを維持する装置として機能している¹⁷⁾。ところが、その一方、インターネットは移住地での移住者同士が顔を合わせる機会を限られたものにする媒体でもある。特にユーチューブ（You Tube）を代表とした無料の動画配信サイトの普及によって、インターネットを通して日本のテレビ番組を視聴することが可能となってきた。また、ヤフー（Yahoo!）やMSNをはじめとした無料で通話可能なインターネット電話を利用する移住者は多く、日本とのつながりを対面的な場に求めずとも、インターネットがその代役を果たしてくれる。つまり、日本にいなくとも、リアルな日本をサイバースペースが視覚化してくれるのである。ただし、「JP カナダ」のように、掲示板を通じた情報交換も見られるため、ここではインターネットの登場によって移住者同士の“face to face”の交流が希薄化するという点に議論を留める。

エスニック・メディアとインターネットの浸透によって、移住者が現地のエスニック・コミュニティと直接的に関わる機会に限られたものになる。なぜなら、これらのツールを介することで、日本との「距離」を感じなくてもよい状況が作られつつあるからである。同じ移住者でも、日本からの情報が乏しかった時代に海を渡った者にとって、母国の動向を知る機会は貴重なものであった。1980年にカナダに移住し、現在アルバータ州カルガリ

一の日本人移住者協会会長を勤めるSさんは、移住当初における移住者間の情報の共有を次のように述べた。

「今はNHKとか本とかいろいろ情報がありますけど、あの当時はほとんどなかったですからね。日本の情報が入ってくることはまずなかったですからね。ちょうど家庭にビデオというのが出だした時期ですから。なんとかそのビデオを見るのがやっと日本の情報、日本のものに触れられるというような時代でしたからね。週刊誌なんかでも一月二月遅れの週刊誌をむさぼるようにみんなで回しながら読んでいるような時代でしたからね。移住者協会に入っていると、そういう雑誌、新聞、日本に帰った人からの話とかね、ありますから。」(50代、男性、サービステクニシャン、カルガリー在住)

エスニック・メディアは従来、エスニックな連帯を確認するための道具として、また現地社会での生活を円滑に送るための補助装置として機能してきた。しかし、エスニック・メディアが移住者にもたらしている影響はこれまでと同じではない。移住者を取り巻くマスメディアの環境の変化は、移住者が物理的、身体的にはカナダに属していても、心理的には日本にいる感覚を維持できるメカニズムとして機能しているといえよう。このような対面の場の変化が一つの引き金となり、「ジャパニーズ」であることを確認し、その紐帯に基づいて何らかの集団的活動を行う機会が減少していることは、本稿冒頭の「遺産桜」の例で示したとおりである。エスニック・メディア、マスメディアを通して、移住者の文化的帰属感のベースは集団から個人へと移行しており、それに伴い、移住者間の結びつきは対面的相互行為よりも情報伝達システムを介した紐帯に基づいているといえる。



写真2 バンクーバーにおける活字日系メディア (筆者撮影)

VI. エスニック・コミュニティの将来：おわりにかえて

戦前の日本人移民の場合、移民側に同化の意志があったとしても、人種的、文化的に相容れない他者としてホスト社会から淘汰の対象となった。戦中の強制移動および強制収容、戦後の拡散政策、リドレス運動などは日本人移民、日系人への排他的措置が具現化したもの、および排斥への対処であり、時代の転換期とその前後を通して彼らはエスニックな凝集性を高めていった。つまり、何らかの危機的な状況がエスニックな意識や紐帯、延いてはエスニックなコミュニティの形成を喚起する大きな要因といえるだろう。

これに対して移住者の場合、戦後 60 年を経てカナダ社会への適応を主体的に選択する環境が整いつつあるといっても過言ではない。そして、エスニック・コミュニティへの帰属意識の希薄化は、このホスト社会への主体的適応と関係している。文化的帰属感が個人化した状況を考えると、移住者にとって重要なのは「所属の仕方 (*way of belonging*)」よりも、「存在の仕方 (*way of being*)」といえる (Levitt and Schiller 2004:11)。言い換えると、移住者はある特定のエスニック・コミュニティに属することで「ジャパニーズ」としてのエスニックなアイデンティティを共有および確認するというより、個々人のなかでそれを内面化している。

本稿では、日系コミュニティに対する移住者の見解と、距離の取り方を通して、彼らと日系コミュニティに見られるギャップの一側面について検討した。その結果、以下の点が明らかとなった。(1) 日本に対するネガティブな印象を持つ移住者にとって、日系コミュニティに関わることは自ら過去の負の記憶に再び向き合うことに他ならない。(2) 多くの移住者は越境を繰り返しながら自分自身の居場所を探し続ける過程にある。(3) 移住者間の近代西洋的文化の浸透によって、北米におけるライフスタイルは移住者にとって身近なものになり、その結果、必ずしも戦前のようなエスニック集団が形成される契機が見出されずにいる。(4) 西洋文化に対する親近感を生成する大きな要因の一つであるエスニック・メディアやインターネットの発達は、同時に移住者の日本との心理的距離を縮め、海外に身を置いているという感覚を曖昧なものにする。

カナダ社会への主体的適応が見られる一方、移住者は必ずしも無条件に受け入れられるわけではない。移住第一世代にとって、現地での就職は依然として高い壁であると同時に、語学におけるハンデの克服は容易ではない。また、暗黙のうちに底流する人種的差別や偏見が、移住者の前に立ちはだかることも否定できない。その結果、日系コミュニティに関わらざるを得ない場合もある。その意味で、現在の日系コミュニティは「保険」のような新たな役割を担いつつある。つまり、移住者にとっての日系コミュニティは、エスニックな紐帯を確認する場というより、ホスト社会への適応をバックアップする受け皿としての役割を担いつつある。本稿では紙幅の関係上、上記のような対カナダ社会ではなく、日系コミュニティを鏡として自己を相対化するケースを中心に扱った。すなわち、移住者にと

って日系コミュニティがいかなる存在であるか、という視点に重きを置いた。カナダ社会に適応できず日系コミュニティに関わらざるを得ない状況で、移住者間、日系人との間にどのようなつながりが見られるのか、もしくは見られないのか等、については今後の課題としたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、立命館大学の河原典史准教授から貴重な助言を賜った。河原先生とはカナダでの調査時期が重なり、筆者の調査研究に対するご指摘やアドバイスをいただくと同時に、本誌への投稿を勧めていただいた。拙稿へのコメントを含め、すべてのご好意にこの場をお借りして感謝申し上げます。また当然のことながら、本稿は移住者の方々のご協力なしには完成し得なかった。お忙しい中、快くインタビューに応じていただいたすべての移住者の方々に、お礼申し上げます。最後に、拙稿の査読に時間を割いていただき、有益なコメントを賜った査読者の先生方に感謝申し上げます。

注

1) カナダでは、概して戦前の日本人移民とその子孫が「日系人」と定義されるのに対して、1967年の移民法改正以降にカナダに渡った日本人は「移住者」と呼ばれる。これまで日系人と区別するために彼らは「新移住者」あるいは「新移民」と呼ばれてきた。しかし、戦後移住40年を経た現在、定住傾向にある彼らをもはや「新」と呼ぶにはふさわしくないという声が出始め、現在では自他共に「移住者」として認知される傾向にある。そこで、本稿では現地の呼称にならい、以下日本人移住者を「移住者」で統一する。

外務省の海外在留邦人数調査統計によると、カナダ在住の日本人は2008年10月1日現在50,201人で、そのうち永住権取得者は31,015人である。留学生やワーキングホリデー滞在者、企業駐在員などの長期滞在者については別枠で論じる必要があるため、ここでは永住権取得者のみを扱う。移住者の移住の形態は、1967年に開始された技術移住を皮切りに、企業移住、退職移住、家族の呼び寄せ、親族援助、選抜労働者、国際結婚であり、近年は主に国際結婚による日本人女性の移住者の増加が著しい（コバヤシ 2003、山田 2005）。

- 2) 移住者が参加している団体の詳細については山田（2001）の表を参照のこと。
- 3) 新二世とは、移住者の子供世代を指す。
- 4) 日本とカナダ間のワーキングホリデー制度は、1986年に始まった。この制度は、若い世代の交流を目的としており、最長1年間、カナダで働きながら語学学習をはじめとした余暇活動を同時に行うことができる（日本ワーキングホリデー協会：

<http://www.jawhm.or.jp/> 最終閲覧日 2010年1月23日）。

- 5) 第二次世界大戦開戦と同時に、カナダ政府は「日本人」「帰化人」「カナダ生まれの日系人」の差を問わず、日系人すべてを「敵国人」と規定し、翌年には「道路キャンプ」「砂糖大根栽培」「自由移動」「ゴーストタウンへの移動」「抑留キャンプ」への沿う移動が戦時特別措置法（The War Measures' Act）によって実行された（新保 1996:174-184）。戦後は、キング首相により日系人への忠誠審査が行われ、不忠誠と認められた者を日本へ送還する一方、忠誠と認められても BC 州に留まることは許されず、カナダ全土へ拡散して定住することが強いられた（飯野 1997:116）。
- 6) 日系移民百年祭とは、永野万蔵がカナダに渡って 100 年後の 1977 年に日系二世、日系三世、移住者を中心としてカナダ全土で催された記念イベントである。バンクーバーでは、百年祭の一環として続くパウエル祭開催に当たって、日系一世にソーシャルサービスを提供する「隣組（Tonari Gumi）」、言語援助組織「ランゲージ・エイド（Language Aid）」の関係者が大きな役割を果たした（和泉 2003:76-77）。
- 7) カナダ政府は、抑留、立ち退き、強制送還、財産の損失、基本的権利の剥奪を被った日系人一人当たり 21,000 ドル、日系コミュニティに教育・社会・文化面での活動援助費用として 1,200 万ドルを支払った（飯野 1997:157）。
- 8) 移住者のほとんどは、「日本人」である自分たちと、「日系人」を区別する傾向にあるが、エスニックなコミュニティという点では、両者を含む意味で「日系」を用いている。従って、発言の中で見られる「日本人」は、日系コミュニティの一員としての「日本人」という意味で用いられていると考えてよいだろう。
- 9) この発言は、ある日系団体でパウエル祭の準備を手伝っている時のものである。1960 年代後半に移住し、食品加工の自営業を行う M さん（50 代、男性）は、男女関係の噂を例に、日系社会の「狭さ」を指摘した。何気なく女性に話しかけると、周囲から「あの人を狙っている」などと言われるので、迂闊に女性と話せなかったという。
- 10) I さんは、自身が同性愛者であることを高校生の時に気づいたという。
- 11) 1977 年に移住し、日本人観光客向けの旅行会社を経営していた E さん（60 代、男性）は、夢破れて日本に帰国する移住者を何人も見てきたと語った。トランスナショナルな移動を考えた場合、双方向的に人びとの動きを考察する必要がある。帰国者のカナダでの生活、帰国後の日本社会への再適応などの実態の把握を、今後国内調査で明らかにしていきたい。
- 12) カナダでは、病院で専門医による診察を受けるには、掛かりつけの医者からの紹介状が必要である。
- 13) 前述の I さんは、カナダ市民権を取らない理由を次のように語った。「取ってしまうと色々、僕はあちこち旅行するのが好きなので、例えば変な国行って何か困りました、

駆け込むのは日本領事館ですよ。でもカナダパスポート持ってたらカナダ大使館の人助けてくれなさそうな気がするんで。」この発言にあるように、日本がもたらす何かしらの安心感のようなものが、常に日本とのつながりを維持しておきたいという感情の源泉の一つと考えられる。

- 14) 多文化主義批判はエスニック・マイノリティに対する優遇措置への白人側からの批判であり、彼らからすると多文化主義に依存するエスニック・マイノリティは自己責任意識に欠けているということになる。その一方、あからさまな人種的偏見や差別はなくなりつつあっても、現実的には有色の人びとは文化的に異なる人びととして考えられており、イギリス系あるいはヨーロッパ系優位の状況下では有色の人びとがカナダという国家への帰属感や一体感を持つことは困難であるという指摘も根強い (Dhruvarajan 2000:171-172)。
- 15) 具体的な職種は、弁護士、医師、会計士、歯科衛生士、栄養士、銀行員幹部)、エンジニア、会社員、ビジネスコンサルタント、公務員、看護師などである (山田 2000:218)。
- 16) JP カナダは 2000 年、メイプルタウンは 2004 年より発信。
- 17) インターネットでの情報収集や交流は若者を中心に広がっているが、「JP カナダ」が発信を開始した 2000 年以降に普及の速度が速まったと考えられる。インターネットによる現地の情報の収集や、掲示板を通じた交流が可能になったことで、日系団体や日本食の食料品店に足を運び新聞や機関誌などを手にする手間が省け、パソコン一つで手軽に「日本」とつながることができるようになった点が、その大きな要因と考えられる。

文献

(日本語)

- 飯野正子, 1997, 『日系カナダ人の歴史』東京大学出版会。
- 和泉真澄, 2003, 「「歴史」と「コミュニティ」の復権:「パウエル祭」とバンクーバー日系カナダ人」『戦後日系カナダ人の社会と文化』立命館大学日系文化研究会編, 不二出版 73-100。
- 稲村 博, 1980, 『日本人の海外不適應』日本放送出版協会。
- 加藤恵津子, 2009, 『「自分探し」の移民たち:カナダ・バンクーバー, さまよう日本の若者』彩流社。
- コバヤシ, オードリー, 2003, 「ジェンダー問題切り抜けとしての移民:日本人女性のカナダ移住」岩崎信彦他編『海外における日本人, 日本のなかの外国人』昭和堂 222-238。
- 佐々木敏二, 2003, 「日系移民百年祭から全国日系組織変革へ:全国日系カナダ市民協会から全国日系カナダ人協会へ」立命館大学日系文化研究会編『戦後日系カナダ人の社

会と文化』不二出版 41-72.

塩原良和, 2008, 「多文化主義国家オーストラリア日本人永住者の市民意識：白人性・ミドルクラス性・日本人性」関根政美他編『多文化交差世界の市民意識と政治社会秩序形成』慶応義塾大学出版会 143-161.

下茂英輔, 2004, 「伝統的移民共同体の変容と関係性の再構築：カナダ日系社会における旧移民と新移住者の事例から」『族』つくば人類学研究グループ 36号 23-42.

白水繁彦, 2002, 「エスニック・メディアの変容：メディア社会学の観点から」『移民研究年報』第8号 13-39.

新保満, 1996, 『石をもて追わるるごとく』御茶の水書房.

名越万里子, 2005, 「1990年代中期以降の日本人カナダ移民におけるプッシュ・プル要因」『立命館言語文化研究』17巻1号 129-136.

藤田結子, 2008, 『文化移民：越境する日本の若者とメディア』新曜社.

南川文里, 2005, 「在米日系人／在外日本人であること」の現代的意味—エスニシティの現代社会論に向けて」『立命館言語文化研究』17巻1号 137-143.

南川文里, 2007, 「二つのジャパニーズ：移動とエスニシティの現代社会論に向けて」『日系人の経験と国際移動：在外日本人・移民の近現代史』米山／河原編 人文書院 28-49.

山田千香子, 2000, 『カナダ日系社会の文化変容：「海を渡った日本の村」三世代の変遷』御茶の水書房.

山田千香子, 2001, 「バンクーバーにおける日系移民の活動と連帯」『長崎県立大学論集』37巻3号 121-145.

山田千香子, 2005, 「カナダ日系女性移住者の文化変容に関する文化人類学的研究：その2」『長崎県立大学論集』39巻2号 55-89.

米山 裕, 2007, 「環太平洋地域における日本人の移動性を再発見する」『日系人の経験と国際移動：在外日本人・移民の近現代史』米山／河原編 人文書院 9-23.

(英語)

Dhruvarjan, Vanaja. 2000, "People of Color and National Identity in Canada." *Journal of Canadian Studies*. 35 (2) : 166-175.

Levitt, Peggy and Schiller Nina, Glick. 2004 "Conceptualizing simultaneity: A transnational social field perspective in society", *International Migration Review*, 38 (145): 595-629.

Makabe, Tomoko. 1998, *The Canadian Sansei*, University of Toronto Press.

Nagoshi, Mariko. 2007, *Socio-cultural conditions of Japan reflected by factors including recent Japanese immigration to Canada*, PhD dissertation, University of British Columbia.

Sato, Machiko. 2001, *Farewell to Nippon: Japanese Lifestyle Migrants in Australia* (Japanese Society Series) Trans Pacific Press.

(しも えいすけ・北海道大学大学院博士課程)

**“Nikkei community” and Japanese migrants in post-redress period:
A case study on *Ijusha*’s cultural sense of belonging in Western Canada**

Eisuke SHIMO

PhD program, Graduate School of letters, Hokkaido University

(Canadian Studies/ Cultural Anthropology)

Key Words: *Nikkei* community in Canada, Japanese migrants, Transnationalism, Cultural sense of belonging

Focusing on the situation in western Canada, this paper aims to investigate the participation of Japanese migrants in the established “*Nikkei* community.” Within the long history of research on prewar Japanese migrants and their generations of descendants, attention has been paid primarily to ethnicity and acculturation. However, the increase of Japanese migrants since the 1990s has started to generate academic interest. Within the Canadian *Nikkei* community, those who left Japan after 1967 are called “*ijusha*.” In recent studies, their motivations for migration, interactions with both other *ijusha* and the established “*Nikkei* community”, and their notions of nationality and ethnicity have been considered.

While these considerations have taken it as self-evident that contact between *ijusha* and the *Nikkei* community is limited, the reasons for the estrangement between these two groups has not been adequately explored. *Ijusha* are often unwilling to participate in *Nikkei* activities, and instead tend to merge directly into Canadian society by utilizing their high occupational skills and language ability. In this paper, I use data collected through participant observation and interviews with *ijusha* to discuss their sense of cultural belonging. As a result of this research, I have identified four factors that contribute to the gap between *ijusha* and the *Nikkei* community. They are 1) a denial of “Japan,” 2) de-abroadization, 3) the media, and 4) lifestyle migration and plural “homes.”